

沖縄市文化財調査報告書第二十七集

むかしばなひⅡ

二〇〇二年三月

沖縄市教育委員会

あいさつ

沖縄市教育委員会

教育長 小 渡 良 一

このたび沖縄市文化財調査報告書第二十七集「むかしばなしⅡ」を発刊するにあたり、一言ごあいさつを申し上げます。

昔話は地域の風土の中で育まれ、時代を越えて連綿と語り継がれてきた先人の遺産といえるものです。しかし、めまぐるしく変化してゆく時代の流れは価値観の多様化をもたらし、昔話を語りついでゆくことも次第に困難な状況を呈しております。

こうした背景を重視し、沖縄市教育委員会では、文化財保護行政の一環として、昔話の保存を図るため、昭和五十五年度から沖縄国際大学口承文化芸術研究会の協力をあおぎ本格的な民話調査を実施して参りました。その結果、予想を上まわる話者の皆さまの話を記録にとどめることが叶いました。本昔話集は通算四冊目の上梓となっております。

今回の編集にあたっては、機関誌に掲載させていただきました昔話を集成するという方針を採用しました。よつて、昔話、笑い話、伝説ありと話も多彩をきわめております。これらの話の中には、生きていくための知恵や愛のすがたがふんだんに織り込まれ、時代がかわっても人々の生き方に不变の領域があることを教えてくれます。

本報告書が、家庭や学校、ひいては生涯学習の場で広く活用され、次代を担う子どもたちの愛郷心を培う一助となることを期待してやみません。

おわりに、お話を聞かせて下さいました地域の皆様ならびに関係者にたいしまして、深く感謝申し上げます。

二〇〇二年三月

凡例

一 民話集の構成

② 話の始めに題名、話者名及び生年月日、字名を記し、
収録テープNO(収録テープに番号をつけ博物館に保管している)と収録面を記した。

① この民話集は、「教育広報おきなわ」(一九八〇年四月号～一九八一年一月)に掲載したものまとめたものである。

② この民話集には、話者の重複や、同類の話が頻出するが、語りの良さと、語りの変化が見受けられるのであって掲載した。ただし、話者が同一で、同類の話は削除した。

④ 「」の会話部分は改行にした。ただし、心の中で思っていることや、考へていることは「」で示し、改行しなかった。

⑤ 注記については、地名、地域独特な意味をもつ語句、民俗語彙、注記が必要と思われる箇所については、掲載話の後ろにできるだけ注記した。

二 本文について

① 民話採集時においては、話者が時々話を中断したり、つぎに続く話の内容を思い出し、いきなり話し始めたりすることがある。このような話は、補足調査などや話の筋を検討の上、編集者によつて加筆し補足したものもある。

三 原稿作成、及び編集、資料整理

辺土名初美・金城直子・仲本朝彦・宮城利旭、
比嘉清和・宮城昭美・當真香・前田一舟

③ 題名は掲載誌の読者を配慮し、編集者が変えたものもある。題名下の()内は民話採集時における話型名である。

むかしばなしⅡ 目次

あいさつ

沖縄市教育委員会 教育長

小渡良一

1

凡例

2

本文目次

4

本文

8

参考文献

78

おわりに

80

年令早見表

79

本文目次

1	婆いるか	金城 ハル (明治四一年五月三日生) 東桃原	8
2	チンチーの足が小さいわけとハブが脱皮するわけ	上根 ウサ (明治二年二月五日生) 宮里	...
3	ハブと貧乏人	内間 シモ (明治四年二月五日生) 城前	...
4	白でつかまれた盗人	鳥袋 次郎 (明治二四年四月七日生) 知花	...
5	猿になつた金持ち	鳥袋 キヨ (大正四年二月一日生) 高原	...
6	産神問答	普久原ウシ (大正二年一月五日生) 嘉間良	...
7	雨蛙不孝	平田 盛永 (明治四一年六月六日生) 登川	...
8	フレンドシで天気を占うおじいさん	屋宜 盛行 (大正三年一月五日生) 安慶田	...
9	十二支の始まり	比嘉 貞信 (昭和二年四月五日生) 上地	...
10	水の神の寿命	普久原 幸 (大正五年三月五日生) 泡瀬	...
11	妻の知恵で城壁を造つた石太工	久場 政三 (明治四三年七月五日生) 園田	...
12	カシチーの始まり	普久原ウシ (大正一年一月五日生) 嘉間良	...
13	大歳の客	平田 盛永 (明治四一年六月六日生) 登川	...
14	物まねが好きだった孟子	知念 真章 (明治四二年三月二〇日生) 胡屋	...
15	ウナイ神	仲宗根盛雄 (明治四三年九月一五日生) 登川	...
16	家の周りにグシチをさすのは・・・ね	上根 ウサ (明治二年二月五日生) 宮里	...
17	お正月にクガニーをお供えするのはね・・・	盛英 (明治四年一月一〇日生) 山里	...
18	ヤキマージ由来	35 33 31 30 29 26 24 23 22 21 20 19 17 15 14 12 10 8	

38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
城間仲 〔ナカシマノミコト〕									夫婦の縁										チャーギぬ精
									猫を木に吊るすわけ										フユーナムンの教え
									スーコーに供を泣かすのは禁物というお話										海の水がからいわけ
									白骨になつた旅人										金持ちの過ち

金城 初子 (大正五年二月四日生) センター :																				
島袋 次郎 (明治三四年四月七日生) 知花 :																				
佐久田千代 (大正七年八月五日生) 室川 :																				
古堅 宗信 (大正五年一月三日生) 安慶田 :																				
新城 安平 (大正二年二月二日生) 室川 :																				
神里マカト (明治四五年八月一日生) 安慶田 :																				
松下 盛一 (明治四年五月一〇日生) 池原 :																				
普久原ウシ (大正二年一月五日生) 嘉間良 :																				
西平 マツ (明治四四年六月一五日生) 久保田 :																				
桑江 朝盛 (明治四年五月一七日生) 中の町 :																				
国吉 キヨ (大正元年一月五日生) 中の町 :																				
島袋 次郎 (明治三四年四月七日生) 知花 :																				
鳥袋 次郎 (明治三四年四月七日生) 知花 :																				
神里マカト (明治四五年八月一日生) 安慶田 :																				
普久原ウシ (大正二年一月五日生) 嘉間良 :																				
平田 嗣昌 (明治三四四年二月一〇日生) 登川 :																				
島袋 次郎 (明治三四四年四月七日生) 知花 :																				
小渡 シズ (大正八年一〇月一〇日生) 泡瀬 :																				
普久原 幸 (大正五年三月五日生) 泡瀬 :																				
仲宗根トミ (大正一年五月五日生) 登川 :																				
76	74	71	69	67	65	62	60	58	56	54	52	50	48	46	44	42	40	38	36	

插絵…長浜 益美

昭和三十三年沖縄市に生まれる。
一九八八年琉球大学医学部卒業。現在眼科医。
一九八六年より沖縄市の民話の挿絵、わらべ歌
の挿絵、紙芝居など多くの作品をつけてがける。

むかひばなひⅡ

1 婆いるか

(塩は嘉利)

金城ハル (明治四年五月三日生) 東桃原

昔、子供には恵まれなかつたが、大変仲の良い夫婦がいた。その夫婦は「お互いつちらが先に死んでも再婚もせずに、骨も墓には入れないでカメに入れて家に葬ることにしようね」という約束をしたのだそうだ。
夫が先に死んだので、妻は約束通り骨をカメに入れてクチャ小に置いてあつた。毎日、「カマドウー、カマドウー」と呼んだら、妻は、「ハイ、ウンドー(はい、いるよ)」と返事しないといけないので、一歩も外へ出ることができなかつた。

ある日のこと、塩売りが、

「チャーピラタイ(こめん下さい)」

「ハイサイ(はい、こんにちは)」

「マースオー コーミソーランガヤー(塩はいりませんかね)」

と訪ねて來たので、

「はい、買いますよ。ダー・アン・シェー チヨーバンヌイツス コーイピラヤー(それなら、一升瓶買いましょうねえ)」
といって、

「チヨーバンノーネーンムン ンダ トウナインジ カティイチャーピラワー(一升瓶がないので、どれ隣りで借りてきましょ
うねえ)」

と妻は隣に行つた。すると、死んだ夫がいつものように、

「カマドウー、カマドウー」

と呼んだらしい。塩売りは、へふしがなことだ、この家には誰もいないはずだが……と思つて、あつちこつち見渡す



が誰もいない。家の裏に行つてみると、カメに蓋されたものが置かれていた。その蓋を開けてみると、中から夫のユウレイが出てきた。塩売りは、

「ウワー」

と驚いて、持つていた塩をまくと、ユウレイはそのままカメの中へもどったそうだ。

そのことから、塩はカリ^(①)なものといわれるようになつたんだって・・・。

注 ①カ メ・・・・貯蔵も目的とした大型のカメ類。

②クチヤ小・・・木造建築の間取りの一つ。裏座のこと。

③チヨーバン・昔、京橋のことで、計りのことである。容積の単位で、一合の十倍。約一・八リットル。

④カリ・・・・縁起のよいもの。

平成二年三月三日

謝敷勝美・石原由香里監取

T 69 B 4



2 チンチナーの足が小さいわけと ハブが脱皮するわけ（雲雀と生き水）

上根ウサ（明治三二年一二月五日生）官里



ある日のことです。神様が①チンチマーグワー（ひばり）に、

「若水を持って来たら、この水で浴びて生れかわりなさい」と若水を下さったので、

「ウー（はい）」

と返事をして水をもらいました。

チンチマーグワーはトースチンを食べてから水を飲もうと思^②い、も
らつた水を置いてトースチンを食べていました。その間に、ハブ^③が出
てきて若水を飲んでしまいました。

チンチマーグワーは神様に、

「水は飲んだか」

と尋ねられたので、チンチマーグワーは、

「トースチンを食べている間にハブが水を飲んでしまいました」

とこたえました。それを聞いた神様はカンカンになつておこり、

「あなたは私の言いつけを聞かなかつたので、罰として足をしばろうね」と言って、チンチマーグワーの足をしばつたそうです。

その時からチンチマーグワーの足は小さくなり、ハブは古い皮がぬけおちるようになつたそです。



2 チンチナーの足が小さいわけと
ハブが脱皮するわけ

注 ①チンチナーハブ方言でチンチナーともいう。せつかのこと。

②若 水・・・元旦の未明に神聖な井戸から初めて汲む水のこと。その水を飲むと若返るといわれている。

③トースチン・イネ科の一年草で食用。唐きび。(高粱をいう)。

④ハブ・・・沖縄に棲息する陸性毒蛇のうち、ハブ、ヒメハブ、サキシマハブの三種の総称。毒性は非常に強い。

平成元年二月五日 比嘉ゆり子・宮城昭美聴取 T 88 A 12

3 ハブと貧乏人（千年蛇）

内間シモ（明治四四年一二月一五日生）城前

昔、ある所に貧しいおじいさんが住んでいた。おじいさんはいつものように、山に薪を取りに出掛けたが、この日に限って山奥深く入っていった時のことだ。山奥深いところなのになぜかそこだけきれいに掃除されていたので、おじいさんは不思議に思っていた。

すると天に昇ろうとするハブを見てしまった。おじいさんはハブに嘴まれないか心配していたが、

「私は千年経つたので、天に昇り神になるところでしたが、あなたに見られてしまい天に昇ることが出来なくなってしまった。あなたが今見たことを誰にも言わなければ金持ちにしてあげよう」と約束し、龍フンをおじいさんにあげ、ハブは天に昇っていった。

それからというもの、おじいさんは龍フンのおかげで暮らしが豊かになつていた。

おじいさんのまわりの人々は、

「どうやつて、そんなに金持ちになつたか」

と聞くのだが、おじいさんはハブとの約束をかたくなに守つて誰にも話さなかつた。

十数年経つたある日のこと、おじいさんは酒を飲んだ勢いで、ハブのこと

すると、どうでしょう！ 話が終わると同時に天からハブの戒めがあり、おじいさんはもとの貧乏人になつてしまつたんだ



と・・・。

注

- ①天に昇ろうと・蛇は陸で千年、海で千年人に見られないで生きていれば、天に昇つて龍になると言われる。
- ②龍フン・・・龍の糞のことと、どんな病気にも効く妙薬と信じられている。

平成二年二月一六日 石川小百合・宜保勝・栗国実聴取

T
181A
1

4

白でつかまれた盗人

(白で泥棒を捕えた話)

島袋次郎 (明治三四年四月七日生) 知花

ある日のこと、ある家の嫁が薪を抱えて台所に運んでいた。そのすきに泥棒が薪の下からすくんで台所の中に入り込み隠れていた。

家の主人は、『ハアハアー、これは泥棒が入ってきたな』と気づいたので、夕飯を食べながら、わざと大きな声で子供たちに話をしたんだ。

「白は物聞きものだから、泥棒に入つたら自分の着物を全部ぬいで、白に着させると誰にも気づかれずに物を取ることができるんだよ」

「へえーそうなのか」

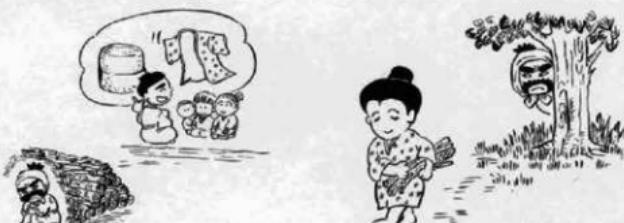
と子供たちはうなずいた。まぬけな泥棒はさつきの話を聞いていて、家の者が寝しづまと、へよし、おれもやつてみよう」と、自分の着物をぬぎ、白に着させ帯を結んだ。その時に、カラカラ音をたてたものだから……たいへん……

家の人に気づかれてしまい、大きな声で、

「ヌスドウドー(泥棒だー)」

とさけばれた。

泥棒は慌てて逃げようと思つても何も着てないので、逃げることもできなくて、すぐさま、その家の人々に捕まつたんだって……



5 猿になつた金持ち（猿長者）

島袋キヨ・(大正四年一二月一日生) 高原

おお昔、とつても金持ちと貧乏者の老夫婦が隣合せに住んでいた。大晦日の晩に、ボロをまとい、蓑笠をさした旅人が金持ちの家を訪ね、

「道に迷つてしましました。今夜一晩だけ泊めでもらえませんか」

とお願いすると、

「今日の大晦日のよい日に、あなたののような見すばらしい物ごいが、ここに来ることじたい縁起でもないことだ。早く立ち去れ」と追い返された。

旅人は隣の貧乏者の家へ行き、

「こんなおそい晩に申しわけありませんが、今夜一晩泊めてくれませんか」

とたのむと、

「どうぞ、どうぞ。今日は大晦日ですが、うちは貧乏で何の御馳走もないでの、このように火をたいて火正月をしているんですよ。どうぞ、あなたもここで暖まって夜をあかしてください」と温かく迎えた。旅人が、

「ナベがあつたら、イロリにかけてください」

というので、言われた通りにすると御馳走がたくさん出てきて、りっぱな大晦日を過ごすことができた。

翌日、旅人は老夫婦にお湯をわかして浴びるよう言つて出て行つたので、その通りにすると、たちま



ち老夫婦は若返ってしまった。

それを見た隣の金持ちが、

「どのようにして若返ったか」

と聞くので、これまでのいきさつを語ると、話が終わるやいなや、すぐに追いかけていって、旅人を連れてきた。旅人は、

「あなたたちも、⁽²⁾若本を汲んできて湯をわかして浴びなさい」

と浴びさせると、その家の人々はみんな猿になってしまい、

山へ行ってしまった。貧乏人の老夫婦は、こんなふしきなこ

とが出来るのは神様にちがいないと話しあつた。

こうして、金持ちの家には誰も住む人がなくなってしまったので、神様は、若返った貧乏人夫婦を住まわせた。ところが、猿になつた金持ちが毎日のようにやつて来て庭のマーテ石に座り、

「私の家を返せ、家を返せ」

と言うので困っていた。そこで神様に相談すると、

「猿がいつも座わるマーテ石を焼いておきなさい」

と教えてくれた。教えられたとおりに庭のマーテ石を焼いて置くと、いつものようにやつて来た猿がその

焼いたマーテ石に座つたから、さあ、大変。猿のお尻はまつ赤に焼けてしまい、あわてて山に逃げていつたまま、一度と家にはこなくなつたんだ。

猿のお尻が赤いのはその時からなんだつて……

注 ①火正月……貧乏で正月の御馳走の用意を出来ないものが、いろいろの火にあたり、それだけで正月を迎えること。

②若水……正月元旦の早朝に村の井戸等から汲む始めての水のことをいう。その水を飲んだり、顔を洗うと若返るという信仰が残っていた。

③マーテ石……黒い固い石で、形の丸もの。



普久原ウシ（大正二年一月五日生）嘉間良

女「人が浜辺で遊んでいた。

そこに白いヒゲのおじいさんが来て、

「あなたがた一人とも妊娠している。一人は男、一人は女だから、その子らが年頃になつたら夫婦にしなさいね」

と言われた。

子供が生まれ、年頃になつたので、おじいさんの言われたとおり二人を夫婦にした。女に徳があつたので夫婦は裕福に暮らしていたが、そのうちに男は浮気をして、妻に、

「おまえはここから出て行け」

といつて追い出し、浮氣相手の女と一緒に暮らした。

出された妻はどこに行けばよいのか途方にくれていると、おじいさんが現れ、

「あの方角に行きなさい」

と言われる所以で、その通りに行くと炭焼き小屋にたどり着いた。女はそこでの炭焼きをしている男と一緒にになり、徳があるので次第に裕福になつていった。

一方、前の夫は妻を追いかけてからは徳がなくなり、家庭はメチャクチャになり食べる物も、着る物もなくなり、あげくのはては乞食になつてしまつた。

ある日のこと、前夫は先妻のところへ、何も気づかずに物をいにきて、子供にも分け与えていた。先妻は前夫と気づき、「あなたは以前は、こんな御飯など食べなかつたのに、今は食べるねえ」



「いと、男は気つき、その場で舌を噛み死んでしまった。

女は今の夫にその事を言えず、家からあまり遠く離れていないところに葬り、お茶や御飯を炊くと真先に戸口に持つていって置いていた。それを見ていた夫がふしぎに思い、

「どうしてあなたはこのように先に食べ物を戸口に持つていくのか」

と尋ねると女は、

「いや、これは食べ物が熱いので冷ますためにやつてあるんですよ」

と答えたらしいが、その御飯にはお箸が置かれてなかつたぞうです。そのことからか、

「お箸と御飯は一緒に置かないで、必ず食べる人が来てからお箸は出しなさい」と言われた。

平成二年八月三日 豊岡早苗・新垣登季子聽取

T
B
10

7 雨蛙不孝

平田盛水（明治四一年六月六日生）登川

雨が降りそつになると、カーカー、カーカーって鳴く雨蛙のこと知っている？

その雨蛙だが、親の言つことを聞かない横着者で、親が、

「今日は海に行つて潮を汲んで来なさい」

といつけると、反対に雨水を汲んで来る。また、

「水がないので、雨水を汲んで来なさい」

と言ふと、これまた反対

そうしているうちに、

「私が死んだら、川の側で葬りなさい」

のことと言つと、反対のことをするはずだか

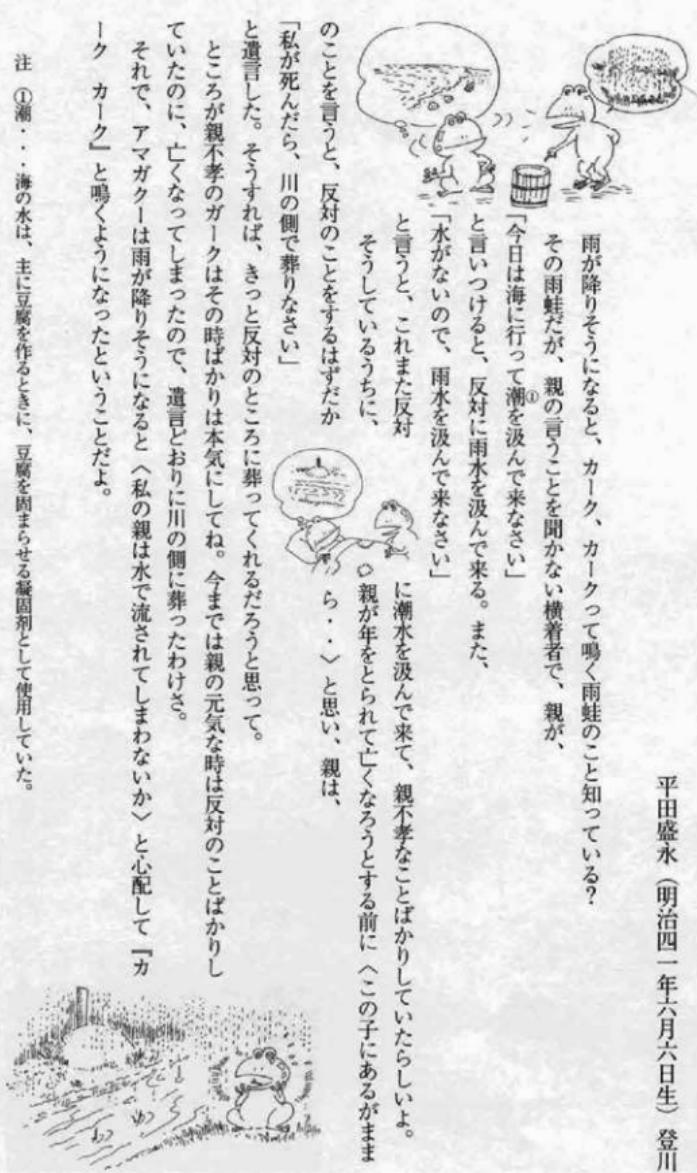
と遺言した。そうすれば、きっと反対のところに葬ってくれるだろうと思って。

ところが親不孝のガーカーはその時は本気にしてね。今まででは親の元気な時は反対のことばかりし

ていたのに、亡くなってしまったので、遺言どおりに川の側に葬つたわけさ。

それで、アマガクーは雨が降りそつになると「私の親は水で流されてしまわないか」と心配して「カーカー、カーカー」と鳴くようになつたということだよ。

注 ①潮・・・海の水は、主に豆腐を作るときに、豆腐を固まらせる凝固剤として使用していた。



8 フンドシで天気を占うおじいさん (禪と天気予報)

屋宣盛行 (大正三年一月二五日生) 安慶田

あるおじいさんが、還暦の祝いにフンドシを贈られたそうです。すると、おじいさんは、「このフンドシは大切な贈り物だから」ということで大事にして、洗濯もせずにいつもそのフンドシばかりしていました。

そのうちに、フンドシはアカだらけになり、フンドシのしめりぐあいで、「今日は雨だ」「今日は晴れだ」というふうに、百百百中天候をあてることができたそうです。

いつものようにおじいさんが、

「明日は雨が降るね」

と言つので、

「どうしてわかるんですか」

とふしきに思い尋ねても、おじいさんは黙つていいだけでのわけを話してくれませんでした。ある日のこと、おじいさんのウワサを耳にした首里の王様が、天氣予報の神とあがめ、天氣予報の職人として首里城に呼びました。そしたら、王様から新しい着物が与えられ、フンドシも新しいフンドシになりました。するとどうでしょう・・・フンドシが湿らなくなり、天氣をあてることができなくなつてしまつたのです。王様は、あてがはずれ、「こりやあダメだ」と、おじいさんはどうどう、お払い箱になってしまったんだと・・・。



ニーニー



9 十二支の始まり（十二支由来）

比嘉貞信（昭和二年四月一九日生）上地

ある年の暮れに、神様が動物たちを集めて、

「さあ、今から走り比べをして、私のところに一番についたものから十二支を決める事にするから、みんな集まりなさい」

と、生きもののすべてに声をかけました。そして、

「ヨーイ ドン」

で、いっせいに走らせたようだ。すると、もう、牛から馬からワンカラ、ワンカラ（われ先にと急ぐさま）とすごい勢いで走ります。ところがどうでしょう。一番遅いと思っていた牛がどういうわけか一番速く、これまた一番速いと思っていた馬が遅かつたそうです。それで、牛が一番になり、続いて虎、兎と到着、十二番目の次に猫が並びました。

いよいよ神様が順番を決める時になると、利口な鼠は牛の角に乗っていたらしく、ビヨコーンと牛の角から飛びおりました。それを知らない神様は、一番は鼠だと思い順に十二支を決めていったので、最後に並んでいた猫が入らなくなってしまいました。猫はどうもおこって、「こんな鼠に負けてしまった。ワジワジーシ ナラン（腹が立つてしようがない）」

といつて、猫は自分の子や孫に、

「いついつの世までも、鼠を見たら殺しなさいね」

と遺言したそうです。

猫が鼠を食べるようになったのは、その時からだそうです。



10 水の神の寿命

普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

ある人が運勢を占う人のところへ行くと、

「あなたは、何月何日に水難にあい死ぬから注意しなさい」

といわれた。

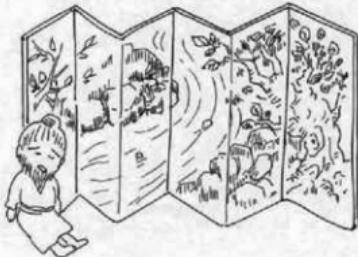
占いの人に予言された日、その人は「水に関する所にいかなければいいさ」と思い、海や川などにはもちろんのこと

行かないし、家族の人も心配して

「外に出したらいけないよ」

と家の中にくまつっていた。

しばらくして、家人が様子をうかがいに行ってみると、なんと占いの人に注意されていたその人は、水の絵が書かれているびょうぶにもたれ死んでいたんだと。



平成二年二月二二日 豊岡早苗聽取 T 56 A 10

11 妻の知恵で城壁を造った石大工

(石垣の積み方)

久場政三(明治四三年七月二五日生)園田

イシジエーク(石大工)^①が石垣を造るのだが、一定の高さのところになると、ふしきなことに壊れてしまうので、インジエークのかしらは「へどうしたものか」と困ってしまい、溜息をついていました。そんな元気のない夫に気づいた妻は、

「何をそんなに悩んでいるのですか」

と聞くと、夫は、

「石垣を積んでいるのだが、どうしたことかいつも同じところで壊れてしまうので困っているんだよ」

と言うと、妻はムシロを持ってきた。そして、まっすぐ立てては倒れるのを幾度となく繰り返したあとで、今度はウナギの体のようくネクネと曲がりくねった形で立てて、そのムシロが立つことをみせた。妻は、

「このムシロのようにまっすぐに立てるとすぐに倒れるけど、このように波形にすれば、石垣でも倒れることはないでしょう」と言うと、夫は、

「なるほど」

とうなずき、妻の教えに感謝したという。

注 ①石大工……石材を細工する職人のこと。



12

カシチーの始まり（ウイミとカシチーの始まり）

昔久原ウシ（大正二年一月五日生）嘉間良

昔、あるところに金持ちの家と貧乏者の家があり、それぞれに同じ年頃の娘がいました。旧暦の六月二五日は、その年生れの娘をジャ一（蛇）のいけにえとする日で、金持ちの家の娘が決まっていました。ところが、金持ちの家の人は、貧乏者の家に行き、

「私達の娘の代わりに、お前たちの娘をいけにえにしてくれたらお金をやるぞ」と話を持ちかけると、貧乏者の家の娘は身代わりになることを引き受けました。

ジャ一にくわれる日、貧乏者の家では「今日で最後だから」といつて、わずかばかりの米に、アワやマーミン（黍）を加えて食べさせてやりました。いよいよわれるという時、

「あなたは心やさしい誠な人なので、ジャ一にくわすこととはできない。家に戻つて親孝行をしなさい」

と言う神様の声があり、帰されました。

娘が帰ると、家族のものはみんな喜び、アカマーミー（あずき）を入れた赤い御飯を炊いてお祝いをしました。その日が旧暦の八月一〇日だったことから、八月一〇日のウイミが始まり、サンを屋敷の四隅にさす習慣もその時から始まつたということです。

そして、今でも娘がくわれると言われた六月二五日には白ガシチーを焼き、八月一〇日には赤ガシチーを焼いているとのことです。



注

①カシチー・・・カシチーとは方言でおこわ（強飯）のこと。その年に収穫された新米でカシチーを作り仏壇や火之神に供え、米の収穫を喜び感謝する行事。地域によって供えるものは、赤飯や白飯であったり、粟やひえを混ぜたりするところもある。カシチーには旧暦の六月に行う六月カシチーと同じく八月カシチーがある。

②一〇日・・・一〇日折目（ウイミ）といい、各戸で特別食事を作って、仏壇に供え拝む日。

③ウイミ・・・年中行事のなかで、生産休養日のアンビをとらなう収穫祭や予祝行事の日。

④サン・・・苗薙の葉やススキなどを結んで作る魔よけ。

平成二年八月三日 伊良音八重子・豊岡早苗・仲里香 聽取

T 150 A 2

13 大歳の客



平田盛水（明治四一年六月六日生）登川

おじいさんとおばあさんが暮らしていました。朝のお茶を飲みながら、おじいさんが、おばあさんに、

「明日は大晦日になっているが、お餅をつく米はあるねえ」

と聞くと、おばあさんは、

「今日食べる米さえもないのに、ましてや、明日の餅をつく米なんてありませんよ、おじいさん」と答えました。

おじいさんは、「そうか。わたし達は若い頃から、よこしまな心を持つこともなく、いつも人には信用されてきて

たのに、どうしていつも貧乏なのかねえ」

とつぶやきながら、外へ出ていきました。しばらく散歩をしていると、身なりもちゃんと整えている人と出会いました。

「私は、仲村家に行きたいのですが、仲村家はどのあたりになっていますか。知つてましたら教えて下さいませんか」と尋ねられたので、

「仲村家といえば、多分、あの金持ちの家のことだと思います。私が案内いたしましょう」と言うと、

「教えていただければ、自分で探していきますから」

「そろは言つても、かなり遠いところですから、やっぱり私が一緒に行きましょう」と親切に案内しました。仲村家の立派な建物が見えてくると、おじいさんは、

「あそこに立派な屋敷團いが見えるでしょ。あそこが仲村家です。ここからだと、もう、大丈夫ですから、どうぞ用事を済ま

せて来て下さい」

と、おじいさんが帰ろうとする、その案内した人が、
「ちょっと待って下さい」

とたもとから紙包みを出して、

「わざかなのですが、お礼として、これをあげます」

と渡そうとすると、おじいさんは、

「私は、それを貰いたいためにご案内をしたわけではありませんので受け取れません」

と断るのですが、必ず受け取って欲しいと、無理におじいさんの懐に紙包みを押し込みました。おじいさんは家に帰るとおばあさんに事のいきさつを話し、お札にもらった紙包みを開けて見ると、なんとそれはお金だったのです。おじいさんはたいそう喜んで、

「これでお米を買って餅も作り、お雑煮も作ろうねえ」と話し合い、そのお金でお米を買って来ました。

翌日、大晦日の晩になると、昨日買ってきた米で雑煮を作り、食べようとしていました。すると、乞食のように見すばらしい姿の人が、

「ごめん下さい。私は三日前から何も食べていません。何か食べさせてもらえませんか？」

と頼みました。おばあさんは、おじいさんにお客さんのきたことを告げると、おじいさんは、「どうぞお入り下さい。この米は自分らが儲けたお金で買ったものではなく、人様からいただいたお金で買ったものだから一緒に食べよう」と快く迎え、腹一杯雑煮を食べさせました。乞食の姿をした人は、

「腹いっぱい雑煮もいたいたので、眠くなつてきました。今日はどうか、ここに一晩泊めさせてもらえませんか。軒下でもいいですから」





というので、おばあさんたちは、

「寒くて風邪をひくといけないので、汚いところですが、どうぞ上がってお休み下さい」

と泊めてやりました。翌朝、お茶を差しあげようと、おじいさんにお客さんを起こしにいかせたら、何度も声をかけても返事がありません。ふしぎに思ったおじいさんが布団を開けてみると、そこには人の姿はなく、たくさんのお金が積まれていました。その時から、貧乏者のおじいさんとおばあさんはたいそう金持ちになつて、幸せに暮らすようになったということです。

昭和六〇年八月二六日 辻士名初美聴取 T15 A18-B1

14 物まねが好きだった孟子（孟子の母のナナマール移転）

知念真章（明治四一年三月一〇日生）胡屋

孟子の小さい頃の話です。

孟子はお母さんとふたりでお墓の近くで暮らしていました。すると、お葬式を見る機会が多く、孟子はお葬式の時に鳴らすカネを打つまねばかりします。それを見ていたお母さんは、「これは大変なことになってしまった」と心配して、町へ引っ越しました。

町では、芝居小屋の近くに住むことになりました。すると、どうでしょう。孟子は、役者さんのまねばかりします。困りはてたお母さんは、今度は学校の側に引っこうことにしました。孟子は、これまでと同じように、学校で勉強している様をみて、今度は勉強ばかりするようになりました。お母さんはホットひと安心しました。

勉強を続けた孟子は、後に世界的にも名高い人になったというこ
とです。



注
①カネ・・・葬式の時に叩く金具のこと。

15 ウナイ神^(①) (旅人とウナイ神)

仲宗根盛雄 (明治四三年九月一五日生) 登川

昔、あるところに機織りをしている女がいました。

ある日のことです。女がいつものように機を織っていると、うつらうつらと眠気をもよおしてきて、とうとう、機織りの上で寝てしまいました。しばらくしてウンウンうなり声がするので、それに気づいた家族のものが、「織機の上で寝るとは……」と、背中をパン！とたたくと、女はびっくりして目をさました……がその拍子につかまえていた糸を全部放してしまいました。女は夢を見ていたのでしょうか。

「船が沈み、溺れている人を助けようとしている最中に起こされてしまったので、助けてあげることが出来なかつた」と、とても残念がつっていました。女の見た夢は現実であったそうです。

そんなことから、船にはたくさんの手をつけた千手観音を船旅する時の神様として祀るようになったということです。

注 ①ウナイ……ウナイは女兄弟をいい、古くは男兄弟を守護すると言っていた。

②千手観音……一六一八年創建の慈眼院に祀られている。そこは俗に首里觀音堂と呼ばれ昔から航海の守護神として崇められていた。



16 家の周りに をさすのは・・・ね

(サン結び由来)

上根ウサ（明治三一年二月五日生）宮里

夜になると、ウスク（和名・アコウ）に住んでいる木の精のマジムンがおじいさんの家にやつて来て、

「ディッカ ウスメー（さあ、じいさん）海に行つて魚を取つてこよう」

と説いてきました。そんな事が三日ほど続いたので、おじいさんは「ウレーヒルマシームン（これは珍しいことだ）」とふ

しきに思い、友達の所へ行き、

「毎夜、さあ、海へ行こう、行こう、と私を起こしにマジムンが来るので大変困っているのだが、なにか良い方法はないものだらうか」

と尋ねると、友達は、

「八月十五夜は後生の礼⁽¹⁾といつて、一年に一回願い事がある時には火を燃やして願うことができ
る。その日がちょうど明日になっているので、屋敷のまわりにグシチを結んで置きなさい。そう
すると、そのマジムンは「アレー・・・ウスメーの家はこの辺りであつたはずだが、珍しいこ
とに山になつてゐるねえ」と思い、逃げて行くはずだから」

と言つた。

ウスメーは、翌日、友達に教えられた通りに、家のまわりにグシチを結んで置くと、いつもの
ようにやつてきたマジムンは「ヒルマシームン（珍しいことだ）山になつてゐるさあ・・・
と、ふしきがつて帰つていったそうだ。

そのことから、八月十五夜には、屋敷のまわりにグシチ（サン）をさすようになったというこ
とだよ。



注

①マジムン・・化け物。

②八月・・・旧暦の八月は、死者の霊、妖怪が現れる月なので、ススキ、桑の小枝の先を結んだものを建物の四隅などに魔よけとしてさす行事。柴差し。

③グシチ・・・すすき。

平成元年一月五日 比嘉ゆり子・宮城昭美聴取 T 47 B 14

17 お正月にクガニーを

お供えするのはね・・・・・ (黄金犬)

上根ウサ (明治二二年二月五日生) 宮里

昔、ある所に、いつもお金の勘定ばかりしているエーキン人(金持ち)の兄さんと、ヒンスームン(貧乏者)の弟の兄弟がおりました。

ある日のこと、お父さんが病気になつたので、弟のほうはすぐさまお父さんの看病へ行きました。一、三日たつた頃、お父さんはヒンスームンの息子に、

「今度の私の病は治りそうもない。私が死んだら、お兄さんと一緒に葬式をすませ、あなたはお金がないはずだから、線香とお酒だけをいつもお供えしなさいね。御馳走は仕度してこなくていいから」と・・・死んでしまいました。弟はお父さんの言われた通りに葬式を済ませ、その後は線香とお酒だけを持ってお兄さんの家を訪ねました。すると、お兄さんは、

「おまえはどうしても、線香とお酒だけを持つてくるのか。御馳走を準備してこないで、これからは二度とここへはくるな」と言われてしましました。弟は困つてしましましたが、今度はお墓へ通うことにしました。そうやつて、いつしか四十九日に

なり、その日もいつもと同じように線香とお酒を手にお墓へ行き供えて、お墓を後ろにして座つていました。すると、突然、犬がガツティカサーに飛びだしてきました。弟は

たいそうビックリしましたが、「お父さんの靈かもしれない」と思い、家に連れて帰りました。そうして、一合の米も一人で分けあって食べるなどして、たいそう可愛がつて育みました。犬はどんどん大きくなり、ふしぎなことに、犬が尾を振るたびに、弟の方



も次第次第にお金持ちになつていきました。

そのことを知ったお兄さんは、うらやましくてしかたがありません。弟の所へ行き、

「どうやつてそんなにお金持ちになつたのか」

と尋ねました。正直者の弟はこれまでのいきさつを話しました。すると、欲ばりのお兄さんは、

「そんな犬なら私にも貸してくれないか」

といって、犬を連れていってしまいました。そうして、お兄さんは「あいつが一合喰わしているなら俺は一升喰わせて早く尾をふらせよう」とたくさんあげました。犬は出されたものを全部食べてしまつたため……死んでしまいました。怒ったお兄さんは、犬を草むらに放り投げ捨ててしまいました。しばらくして、弟が犬を返してほしいとお兄さんを訪ねると、

「お前の犬は私がご飯をたくさんあげたのに、尾を振るどころかそのまま死んでしまつたのでほら、あそこに捨ててしまつたよ」

といいました。

「なんという可愛うなことを……。なにも殺さなくたつていいじゃないか……」



とたいそう悲しみ、犬を連れて帰つて、庭にお墓を造つて葬つてやりました。すると、そこからミカンの芽が生えて、実が枝いっぱいにたわわに実り、それを見た隣近所の人々が買い求めにやってきました。

そうやって、弟はますますお金持ちになつていきました。
その芽を出したミカンの木は、親孝行の心から出来たものだということで、正月や七月には必ずお供えするようになつたと
いうことです。

注 ①クガニー……植物名 橘 黄金色の実がなるので、クガニと呼ぶ地方もある。



18 ヤキマージ由来（ヤキマワリの地名由来）^①

稻嶺盛英（明治四三年一月一〇日生）山里

昔、ある金持が馬を飼っていました。その馬から子馬が生まれました。

しかし、その子馬は何年経つても、立ち上がりもせず、ずっと座ったままでした。しまいに主人は怒って「こんな馬はもうイラナイ！」と、野原に連れて行き捨ててしまいました。すると、ある日のことです。子馬が捨てられた近くの家が、誰かのあやまちで火事になりました。子馬のいるあたりの野原まで燃え広がりました。ところが・・・ふしきなことに・・・捨てられた子馬の周りだけは焼けずに、子馬は無事でした。

おどろいた主人は「これはなんとも不思議なことだ。この馬は神馬にちがいない」と、琉球国王のもとへ差しました。

子馬は、お城の馬係りが、毎日毎日エサを与えて大事に飼いました。

子馬は見る見るうちに噂にのぼるほどの名馬になりました。その後、薩摩での馬競争にも負けることがなく、馬の評判はますます高くなっています。

子馬が捨てられ、火事があった場所は、子馬のいた所だけが焼けないで残ったことから、その地を、「ヤキマージ」（焼廻原）と呼ぶようになったということです。

注 ①ヤキマージ・・字上地の小地名。現在は基地の中にあり第一ゲートから西側に約一キロほどのところに位置している。

19 チャーギぬ精（木魂女房）

金城初子（大正五年一月二十四日生）セントリー

昔、山原のある村で、女に身を変えたチャーギの精と村頭の青年がチャーギの下で逢瀬を重ねていました。若者の心に、日を追うことにその娘への思いが募ってきました。

また、娘も若者に心ひかれていき、ふたりは当然のように夫婦になりました。やがて、ふたりの間に元気な男の子が授かりました。

その子が五歳ころになったある日のことです。頭である若者のところへ、

「首里にお城をつくることになったので、御用材としてチャーギを差しだすように……」

と命が下りました。若者は勇んで家へ帰るとすぐに、そのことを妻に告げました。すると妻はまっさおな顔になりました。

「いまは伐らないほうがいいですよ」

と、か細い声で答えました。ところが、若者は、

「役目を果たせば、出世ができるんだ。お前だって嬉しいだろ？」

と言つやいなや、タスキをかけ、ノコギリを手に意氣こんで森へ出かけました。

太いチャーギにノコギリが切りこまれると、妻はもがき苦しみ、ドーションと地ひびきをたてて木が倒れると、ほぼ同時に妻も死んでしまいました。

息子のカミジュー（亀千代）は、突然、お母さんの姿が見あたらないので、ピックリし、お母さんが村まつりのために準備していた着物を手に必死に探しめざしました。慌てふためいている息子を見つけたお父さんは、

「いったい、どうしたんだ」と尋ねました。息子が、

「お母さんがいない、お母さんがいない」



と泣き叫ぶ声を聞いているうちに、若者は、へ妻はチャーギの精だつたに違いない」と、ようやく事態の重大さに気づきました。

どうしたわけか、切り倒されたチャーギは、大勢の村人が運ぼうとしましたが、ビクともしません。若者は息子のカミジューを木のそばに連れてていき、

「この木を引いてごらん」

というと、カミジューは、目の前の縄をつかみ、

「カミジユートウ マジューン（一緒に）ヨツシヨイ ヨツシヨイ」

と鼻唄まじりに木を引きました。すると不思議なことに、今まで微動だにしなかった木は、たやすく引いて運ぶことができました。

それからカミジューは、

「カミジユートウ マジューン ヨツシヨツシー」

と歌に合わせて首里までチャーギを運んだということです。

注 ①チャーギ・・イスマキ。常緑高木で、旧の一日・一五日に火の神に供える木もある。

平成二年五月三日 宮城昭美・香月夏子・謝敷勝美・石川小百合・大川清子・照屋京子 聽取

T 189 B 4



20 フユーナムンの教え（道楽者の田植え）

道楽者の田植え

島袋次郎（明治三四年四月七日生）知花

昔、あるところにフユーナ

一方、フューナムンはといを作り耕していました。この

そうして、次はいよいよ苗の百姓は、苗を苗床から取る
1つと、苗に土をつけたまま
た。ですから、苗取りも大変
ありませんでした。



うと、田んぼ全部
方が楽なわけです。

An illustration showing a person from behind, wearing a traditional Japanese outfit, standing in a field of rice plants. The plants are tall and green, with some flowers visible at the top. The person appears to be examining the crop.

一方、フユーナムンは、こんな難儀なことはしない、
根についた泥はゆすつてきれいに洗い落としました。苗はいた
きた上に、さほど難儀をすることもありませんでした。さらに、フユ
植えたので、他の人の田に比べると成長が早く、苗はグングン伸びる。

ていた他の百姓の人達は、

ああ、あいつのやり方が、私たちのより勝っているねえ。これからは、あいつに習つてやつてみようかと言ひ合いました。



つて軽く、一人で十人分の仕事がで
ませんでした。植の苗を苗代から取
ーナムンは苗を植える時にも、浅く
を持ち実をつけたのです。それを見

つて軽く、一人で十人分の仕事がで
ませんでした。植の苗を苗代から取
ーナムンは苗を植える時にも、浅く
を持ち実をつけたのです。それを見

それからというもの、田植えをする時の田の耕し方は、ひとつごとに溝を作るやり方をすると土がとても柔らかくなり、また、苗は苗代で苗の泥を洗い落として軽くしてから、本田に運ぶと、持ち運びがたやすくなるだけではなく、泥を落とした苗は根が分かれ、芽がいくつも出るので豊作になるということがわかり、フユーナムンのやり方を見習うようになったということです。

昭和六一年八月六日 宮城昭美聽取 T 30 B 20

21 海の水がからいわけ（塩吹き曰）

佐久田千代（大正七年八月二五日生）室川

ある村に仲が良いとはいえない兄と弟の二人兄弟がいました。お兄さんは畠もたくさんあり大金持ちです。一方、弟の方は日雇いの仕事で生計をたて、お母さんとつしましやかに暮らしていました。

明日は正月という年の晩のことでした。お母さんに何もあげるものがないので、弟は困つてしまい、せめて正月に食べるだけの物を貸してもらおうとお兄さんの家を訪ねました。ところが、何も貸してもらえませんでした。

弟は頼りにしていたお兄さんに断られてしまったので、『正月をどうやって迎えればいいだろう』と途方に暮れ、トボトボと歩いていると、にわかに空が曇り雨が降り始めました。仕方がないので『雨やどりをしていこう』と、雨が上がるのを待っている間に、ウツラ ウツラと眠ってしまいました。すると、夢であつたのか、おじいさんが現れて、

「あなたはどうしてそこにいるのですか？」

と尋ねるので、これまでのいきさつを話しました。すると、おじいさんに、

「お金が必要ですか？」

と聞かれたので、

「お金はいりません。私はお正月にいただくお米が欲しいです」

「それじゃあ、白をあげるからそれをを持って帰り、あなたが欲しいものを言つてから白を右に回せば、希望通りのものが出てくるので、それでお正月を迎えるといいよ」

と言われた。

目が覚めて見ると、おじいさんの姿はなく、白が置かれていました。弟は、夢の中の出来事だと思っていたのですが、白が



あるので、へああ、おじいさんが持つててくれたんだねえ、ありがとう」と感謝し、白を家に持ち帰りました。そうして、おじいさんに言われた通りに、へお米出ろ」といつて白を右に回すと、どんどんお米が出てきたので、お母さんと二人喜んで正月を迎えることができました。

弟はおじいさんから、白のことは誰にも話してはいけないと言われていました。ところが、弟がしだいに豊かになっていく様子をみたお兄さんは、へどうしたことだろう。食べるのもなくヒンスー（貧乏）していたのに、あんなにお金持ちになるなんて」とふしげに思い、弟の家を訪ねて訳を聞くと、正直な弟は白のことを話してしまいました。

話を聞いたお兄さんは、弟の家に忍びこみ白を盗み、海に行き魚をたくさんだそうと白を回すと塩がどんどん出てきて、白を止めることができません。お兄さんが、

「助けてくれー」

と泣き叫んでも助けてくれる人はいません。船は塩で一杯になり、とうとう沈んでしまいました。

海の水が辛くなったのは、このお兄さんの涙のせいだということです。

注 ①白……穀物を碎いて粉にする道具。



平成二年一月一四日 上門千賀子・新垣孝幸・石川小百合聴取

T 172 A 10

22 金持ちの過ち

古歐圭宗信（大正五年一月三日生） 安慶田

昔、ある豪農にサンダー（三郎）という下人が働いていた。サンダーは馬小屋の天井裏で寝起きをしていた。

「サンダー、ここに来てこらん」と呼ばれた。

「はい。なんでしょうか」と行ってみると、主人は、

「お前に聞きたいことがある。馬小屋の天井のそばで毎日、鳥が卵を



産んでいるが、卵がいつのまにかなくなつて



いるが、知らないか」と聞きました。

「私は知りません」と答えると、

「それなら、そこに誰か訪ねてくる者はいないか」

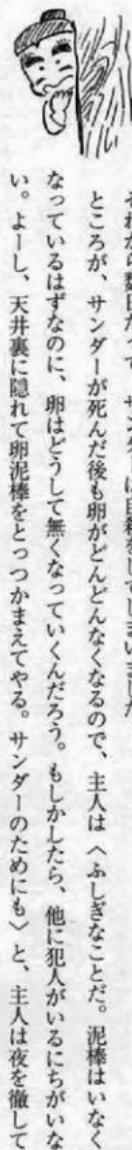
「いや、私のところに訪ねてくる者はおりませんが……」

「それなら、その卵は誰が取つたんだろうか」「私にはわかりません」

「お前の部屋の傍らで卵を産んでいるんだから、お前以外にその卵を取る者はいない。お前が盗ったんだろう」と責めた。



それから数日たつて、サンダーは自殺をしてしまいました。



じっと隠れて待ちました。

夜中にゴソゴソと小さな物音がしたので、「へいよいよ現れたな」と明かりをつけると、ピックリしたことに、大きな不ズミが頭の上に卵を乗せて運んでいった。主人は「ああ、なんてことだ。卵を盗っていたのがネズミだったとは。サンダーは正直者で働き者だったのに」と、主人は、サンダーに罪をかぶせ死にいたらしめたことを後悔しました。

悩む日々が続き、ついに心労がたり、主人も死んでしまったということです。

そのことから、「七度はからつて人を疑え」という言葉が生まれたということです。



平成二年八月二〇日 烏元要・崎原須麻子 聽取 T120A1

23 ヤブ医者のいわれ（ヤブ医者）

新城安平（大正二年一月一日生）室川

昔、沖縄が中国と貿易が盛んだった頃のことです。

中国の船が名護湾の近くで遭難し、船に乗っていた人の中から、ただ一人だけヤブ^①という人が助かりました。ヤブとは、医者のことを意味する名前であったそうです。そのヤブが、持ち前の技術を生かし、針とかお灸を施して治療の効果をあげ、人々を助けていました。そのことが口づてに広まり、人々に人気を博し、遠くは中頭まで往診することもありました。

腕のいい医者の噂は村から村へと伝わり、遠く首里の王府までも届き、ついには王様に呼ばれることになりました。首里城に着くと、ヤブは、王様の顔を見出すに、引っぱられた糸で脈をとるように言されました。ヤブは言われたように糸を手にすると、すぐさま、

「ヤナ、マヤークワ（猫のやつめ）」

と言ったものだから、傍で見守っていた部下の人たちはビックリして、

「王様に向かってなんてことを言うんだ。殺してやる」とヤブに襲いかかろうとしました。

すると、王様に、

「待て！」

といつて止められました。なぜなら、王様の脈をとろうと繋いであるはずの糸は、なんと、ヤブが言つたように、猫に繋がれていたからです。王様は、ヤブのこのような確かな腕を認め、自分の主治医として迎えるようになつたということです。

名護の屋部という地名は、その人の名から付けられ、「ヤブ医者」という言葉は実は、名医のことを意味する代名詞であった



ということです。

注 ①ヤブ・・・唐の人が国頭層部に漂流し、医術にすぐれており、後に王府に招かれた。以後、漢方にすぐれた人をヤブーと称する。漢方の医術を伝える医者。

平成二年一月一四日 武嶋昭子・通事美香聴取 T173B1

24 德のある娘 (炭焼き長者)

神里マカト (明治四五年八月一日生) 安慶田

あるところに武士の娘がいた。年頃になつた娘には多くの男性から結婚の申し込みがあつた。しかし、娘はそのたびに

「夫は自分で決めます」

といつて、断り続けていた。

「魚はいりませんか」

と魚売りが来た。娘は、「ああ、この人が私の夫になる人だ」と、二階から駆け下りてきた。そして、両親に、

「私の夫になる人はこの人です」

と言つと、

「ほんとうに、あんな貧乏者と結婚するのか」

とたいそう驚いたが、娘は、

「だって、私の結婚する人はあの人に決めました」

と返事をした。そして魚売りの若者に、

「私をお嫁さんにして下さい」

とお願いすると、若者は、

「私は結婚する気はないのに、どうしてそのようなことをいうのですか」

と断つた。ところが、娘があまりにも熱心に頼むので、結婚することになった。

幾日かが過ぎ、男が妻の実家を訪ねたとき、よそのお客様には御馳走を出しているのだが、男にはお茶だけしか出しません。



男は腹を立て、家に戻りそのことを話すと、妻は、「あのお茶を飲むと一日中でもおなかがすくことがない、一番いいお茶だから、あなたにしか飲ませなかつたんですよ」と教えた。

それから、ましまばらくたつてから、妻の実家から、

「黄金をあげるから来なさい」

というので、夫に行ってもらつた。夫は黄金を持って帰る時に、鳥がいたので、まわりにあるだけの石を投げつけ、それがなくなると、先程もらつたものをへまた、こんなつまらない石つころを持たして」とワジワジーしていたので、それも全部投げつけてしまつた。

夫は家に着くと、

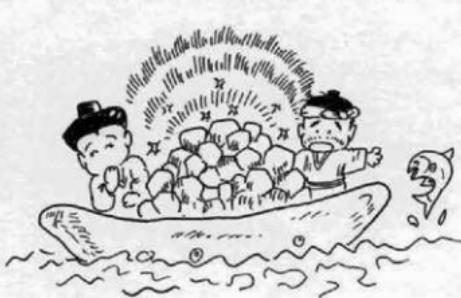
「あなたの両親は私につまらない石を持たしたので、鳥に投げつけてきたよ」と言うと、

「あれは石ではなくて黄金というものですよ」とビックリして教えた。すると夫は、

「あんなものなら、いつも私が魚を捕るところにいくらでもあるよ」と言うので、妻は、

「それなら、それを取つてきて下さい」とお願いした。夫は、さつそく出かけて行き、船に沢山の黄金を積み込んで帰つてきた。

その時から、ふたりは大金持ちになり幸せに暮らしたということです。



25 大歳の客（東恩納担当の話）

松下盛一（明治四五年五月一〇日生）池原

むかし、東恩納から首里の御殿へ毎日勤めに出ていたいそそう正直者で、親孝行の若者がいました。

ある年の晩のことです。首里の御殿で夕食が出来ました。若者は、ご馳走の半分を食べ、半分は残しました。すると、それを見ていた主人が、

「あなたはこうして、半分残すのですか」と聞きました。すると若者は、

「実は、家に年老いた両親がいて、残りの半分を持つていってあげたいんです」と答えました。

「それはわかった。だけど、このご馳走は全部食べなさい。両親のものはちゃんと準備するから」と言われました。

夕食がすむと、主人は約束どおりに両親へのご馳走を持たして下さいました。さてお土産を手に若者が家へ急いでいるところ、

「二ンセー、どこに行くのですか」

と、道中で白髪のおじいさんに声をかけられました。

「私は東恩納の家へ帰るんです」

「私は金武までだが、一緒に行つてくれ

と頼まれました。老人は若者が手にしている包みを見て、

「手にしてるのは何ですか

「私には年老いた両親がいて、お土産です」

と、そんな話を交わしているうちに、若者の家につきました。若者は、

「おじいさんは、まだ、これから遠くまで行くのですから、こうぞ、ここで休まれてから行かれてはどうですか」と説いました。しかし、おじいさんは神様だったので『その家は貧しくて何もない』ということを知っていたので、その人がご馳走を出してあげ、帰る時にヌアシの玉をカメに入れて庭に埋めました。それから若者に、

「カメの中に食べ物を入れて庭に埋めてあるから、取つて食べなさいね」

と言つて、その家をあとにしました。

翌日、おじいさんに言われたように庭を掘り起こし、カメを出してみると、その中にはクガ

二（黄金）が沢山入っていました。

おじいさんの置き土産のおかげで若者たちは金持ちになり、幸せに暮らしたそうです。



注 ①東恩納・・・石川市の字のひとつで南に位置し、沖縄市に隣接している。

②首里・・・那覇市首里。王朝時代は政治の中心地であった。

③御殿・・・首里の王族や按司などの邸宅をいう。

④二ノセー・・・年長者が青年に呼びかけるときの言葉としてここでは使つてゐる。「そこの青年よ。」

⑤金武・・・地名。国頭郡金武町の字のひとつ。

⑥ヌアシの玉・・・宝珠の玉で、不思議な力を持ち、幸運をもたらすとされる玉。

26 孝行娘（孝行娘とヌブシの玉）

普久原ウシ（大正二年一月二十五日生）嘉間良

昔、貧乏の家と金持ちの家で、同じ年の同じ日に女の子が生まれました。貧乏の家のお母さんは、子供を生むとすぐに家を出ていってしまいました。残された目の不自由なお父さんは乳飲み子を抱え、赤ちゃんのいる家々を訪ね歩きまわり乳を貰っていました。その様子をみていたある女人が可愛いそうに思い、

「その子供を私に育てさせてくれませんか」

と声を掛けました。それが縁で二人は結婚しました。

娘が年頃になつた頃、蛇のいけにえとして村の娘を出さないといけない事態が起つて、同じ日に生まれた娘一人がその候補にあがり、クジで決められることになりました。貧しい家のお母さんは、朝から晩まで娘の無事を神様に祈り続けました。クジの結果、お金持ちの娘がいけにえになることが決まりました。すると、金持ちのお父さんはお金を手に、貧乏者の家を訪ね、自分の娘と替わってくれるように頼みました。しかし、貧乏者のお父さんもお母さんも娘の命が大切なので断りました。そのいきさつを見ていた娘は、家の貧しさを救おうと、両親に内緒で金持ちの申し出をこつそり引き受けました。

いけにえになる当日、娘はお父さんの枕元にそつとお金の包みを置くと、身がわりに出で行きました。しばらくして、お父さんが枕元に置かれていた包みがお金であることに気づきました。

妻が帰つてくると同時にお父さんがそのことを話すと、話が終わるやいなや、お母さんはすぐさま娘を助けに家を飛び出して行きました。いけにえの場所に着くと、娘はすでに



準備が整って座っていました。お母さんはすぐさま娘の側に座り、

「私も一緒に喰われます」

とそこを動きませんでした。すると、そこへ神様が現れ、

「あなたがたの真心に心を打たれました。もう、喰うこととはしないから帰りなさい」

と言われ、ヌブシの玉をあげました。そうしているうちに目の不自由なお父さんは手さぐりでそこに着き、親子三人抱き合つて喜びました。神様から頂いたヌブシの玉にお父さんが手を触ると不思議なことにお父さんの目は見えるようになったということです。

平成二年二月一四日 豊岡早苗・諸善田綾子・稲嶺悦子聴取 T178A4

27 ムクタウフトウチ

西平マツ（明治三四年六月一五日生）久保田

昔、予言が的中することで知られた男の人がいました。名をムクタウフトウチ（木田大時）と言いました。ムクタウフトウチは、チフドゥン（聞得大君）御殿、首里の王様のオガミ（御願）をする人として仕えていました。ムクタウフトウチの予言はよく当たることから、王様にいたそう気に入られていきました。

ある日、そんなムクタウフトウチのことに不満をもっていた医者が、「どうにかしてこのムクタウフトウチをやつつけよう」とばかりことをしました。そうして王様に、

「ムクタウフトウチは嘘の予言を、人々からお金をせしめています」

と告げ口をしました。そのことを聞いた王様は、三司官と表十五（王府最高役職）にも声をかけ集め、

「ムクタは世に知られた千里眼の能力を持つ名人であるから、皆の前でためしてみようではないか」

と、ムクタウフトウチを呼び、一個の箱のうち、ひとつは空に、もう一方の箱にはネズミを一匹入れて、「ほら、ムクタウフトウチ。お前は神様の言うことがわかるというが、あの箱の中にネズミが何匹入っているか当ててごらん」と申しつけました。すると、ムクタウフトウチは、ネズミの入っている箱を指して、

「三匹」

と答えました。すると、王様は、

「ムクタ！間違ひだぞ！お前はこのようにしてチフドゥン御殿をだましていたんだな。死刑にしてやる」

と言つて、ムクタウフトウチを小湾の浜に連れて行きました。

その後、箱を開けてみたら、そのネズミはお腹に宿していた三匹の子ネズミを産んでいて、ムクタウフトウチの言つていたことが正しいということがわかりました。そこで、急ぎ小湾の浜に使いをやり、

「ムクタウフトゥチを殺すのをやめるように」

と言いましたが、時すでに運く、ムクタウフトゥチは死刑にされた後だったということです。

注 ①ムクタウフトゥチ・玉城間切にいたといわれる占い師。

②チフドゥン・・チフィジン（開得大臣）きこうだいじん。国王の祖先を祭る神官。廟宮に相当する神職で、國家の宗教的元首である。代々、王の娘、または王妃、王の末「人」人があり、

全国の（のろ）をも統御した。〔沖縄語辞典〕

③三司官・・・大臣に相当する役で三人いたため三司官ともいう。三人の重職で協同して国を輔佐する。

④表十五・・・御評定所の一五人の役人。三司官に次ぐ役人で各長官および次官に相当し、下の御座を構成する。〔沖縄語辞典〕

⑤チフドゥン御殿・開得大君の住む御殿のこと。

⑥小 湾・・・浦添市の字。

平成二年二月二日 昭屋京子・大川清子・石川小百合・宮城昭美訳取

T 188 A 4



ニーブイ虫次郎

桑江朝盛（明治四五年五月一七日生）中の町

昔、ニーブイ虫次郎という名の非常に怠け者の青年がいました。ニーブイ虫次郎は仕事もせずに毎日も夜も寝てばかりいました。

隣の金持ちの家にはきれいな娘が住んでいました。ニーブイ虫次郎は隣の娘をぜひお嫁さんにしたいと思い、「どうしたらいいのだろうか」と、そのことばかり考え、お母さんに、

「仕事をしなさい」

と言われても耳に入らず、その娘の事ばかり考え続けていました。そんな毎日を過ごしているので、まわりの人々も人間あつかいをしないばかりでなく、怠け者とあざ笑うばかりでした。ある雨の降る日、ニーブイ虫次郎はシラサギを買つてきて、庭にある大きい木の上に登り、隣のお金持ちの家に向かって大きな声で、

「私は神の使いの者であるが、あなたたちの娘を隣のニーブイ虫次郎と結婚させないと、娘の命を取られてしまう。早く嫁にいかせなさい」

と言つて、シラサギを放し、空高く飛ばしました。すると、娘のお父さんは、天へ飛んでいくシラサギを見て、「これは神様にちがいない」と信じ込んでしまいました。

翌日、ニーブイ虫次郎の家を訪ね、

「わたしの娘をどうぞ、あなたの嫁にして下さい」と申し出るしまつでした。ニーブイ虫次郎の両親は金持ちの申し出を聞き入れようとしたが、昨夜の出来事を話すと、ようやく信用し、大喜びで息子の結婚を承諾しました。



それからしばらくして、二人はめでたく結婚しました。その後、ニーブイ虫次郎は心を入れ替えて一生懸命働くようになり、その家は栄えたということです。

注 ①ニーブイ虫・・眠つてばかりいる者のあだ名。

平成二年八月三日 平誠美恵子・新城真恵聴取 T16A15

29 犬婿入

国吉キヨ（大正元年一月五日生）中の町

昔、ある殿内の殿様が白い大きな犬を飼っていました。その犬はとても賢く、どこへ行くにも殿様のお供としてついて行きました。

ある日のこと、殿のことをよく思っていない人達に攻められた時、その犬は主人のために戦い、助けてあげました。主人は命を助けられたお礼に、犬に褒美としておいしい御馳走をあげるのですが、犬は喜ぶ様子もなく、ただ、ただ、ただ、主人の顔を見つめてばかりいました。主人は不思議に思い、「これは私に何か言いたいことがあるはず」と察しているものの、聞き出すことができなく困っていました。それでも相変わらず犬は主人の顔ばかりみつめるので、主人は犬に向かって、

「おまえの欲しいものがあればなんでもやるのだが……」
と声をかけると、犬は、

「私はなにも欲しいものはありませんが、あなたの娘がほしいです」

と答えたので、主人は驚いて、「ああ、おまえはこのことを言いたかったばかりにすっと私の顔を見つめていたんだな」とわかりました。

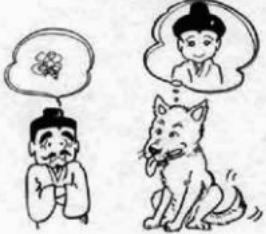
そろそろ娘に向かって、

「お前を犬と一緒に流すから、船の着いた場所で二人で住むように」

と言い、船に乗せ流しました。娘は親の言うことには逆らえないでの、親の言うとおりにしました。ところが島はいつこうに見えず、娘は「もうどうなつてもいい」となげやりな気持ちになっていました。すると犬が、

「私たちの住む島が見えてきたよ」

と話しかけてきたので、娘は「この夫は言葉を話すことができるんだ」と少しホッとした気持ちになりました。二人が着いた





島は宮古島で、島に着くと犬は娘に、

「私はしばらくの間留守にするが、淋しくても一人で我慢して待っていなさい」と言い残し、出かけて行きました。

犬と約束した日になると、娘はいてもたつてもいられなくなり、犬の入って行った洞窟にかけていきました。すると、犬はシッポ以外は人間に変わっていました。犬は、

「もう少しでちゃんとした人間になれたのに」

と残念がりましたが、もう見られてしまったのでどうすることもできませんでした。それで、シッポだけは残ったままになったそうです。

宮古島は神様であられた犬と娘から始まったということです。おばあさんたちが、「宮古の人は犬の子である」というのは、この話に由来するもので、宮古では今でも「犬ガマ」という拌所を人々が拌んでいるということです。

注 ①宮古島・・・沖縄本島南西部、約三百キロにある宮古諸島の全城をいう。

平成二年二月一四日 照屋京子・與座範秋・山城綾子 訳取 T171A8

30

兼箇段ヤーマグワー

島袋次郎（明治二四年四月七日生）知花



昔、具志川の兼箇段に住んでいた夫婦がいました。夫が首里勤めをしていたので、妻は毎晩、芋（芭蕉）をつむぎながら、その帰りを待っていました。それで、いつしか人々はその妻を「兼箇段ヤーマグワー」と呼ぶようになっていました。

夫が仕事と家を行き来するある日のことです。浦添のアガリトウングワの後生（あの世）の人々が、「毎晩遅くまでヤーマ（糸車）をまわしている人の命をとってくるように」

と使いにやらされました。夫はいつも仕事帰りの途中でその人と出会いました。兼箇段ガーラに

さしかかった時、川の水がさが増していたので、夫は親切にも、その浦添のアガリトウングワの後生の人をおぶって渡してあげました。ところが、その後も後生の人は夫の跡をつけてくるようになりました。

夫はふしきに思い、

「どこに行かれるのですか」

と問うと、後生の人は、

「実は私は浦添のアガリトウングワから、一晩中ヤーマを使っている人の命をとってくるようにと命令されたのですが、つきとめていって、ヤーマをまわしているのが、あなたの妻と知ったのです。ほんとにびっくりしました。あなたには川を渡してもらった恩もあるし、どうしたものかと悩んでいるのです」

と打ち明けました。

「あなたの妻と代わりになるような年の人はどうぞいますか」



と尋ねました。夫は、

「あそこにいますよ」

とその方向を示しました。そこで後生の人は、

「それなら、その人の命を取つていくので、このことはだまつていなさい。これからは夜中までヤーマを絶対にまわさないようにしてください」

と諭して去つてしましました。そしてしばらくして、自分の妻のかわりに、同じ年頃の女の人の命が奪われたということです。その話から、今でも糸車をまわす時には、「ウー ウー ウー」という音が出るといわれ、また、同級生が病気になった時に見舞いに行くと自分の命と取り替えられるから、義理を欠くとしても見舞いに行かないようにという言い伝えが残っているのです。

注
①兼箇段・・・具志川市の西部の字。沖縄市の池原と隣接。

②ヤーマ・・・糸車。機織りに付属する器具。

③グワ一・・・小さいものに対する愛称の接尾語。

④具志川・・・具志川市のこと。沖縄中部の東海岸に位置し、中城湾に面する。

⑤百里勤め・・・王府の所在地首里には王族や按司のような身分の高い士族が居住していた。そこに奉公に行くこと。

⑥浦添

アガリトゥングワ・浦添は本島南部で、宜野湾市、那覇に隣接する市。アガリトゥングワは原名（ハルナ）。そこは幽靈のよく出る場所でもあつたらしいがまた、後生の警察のようなところでもあったという。

⑦兼箇段ガーラ・兼箇段部落の西側を流れている川。

31

東恩納当とマジムン
(ひがしのななとう)

島袋次郎（明治三四年四月七日生）知花

むかし、石川の東恩納に屋号、東恩納当と呼ばれている家があった。そこに、首里勤めをしている大層力持ちの武士が住んでいた。武士は仕事の行き帰りにマジムンが出るとウワサされている浦添のアガリトウングワ（原名）を通っていたが、一度もマジムンに出くわしたことがなかった。

ある日のこと、いつものように首里の御殿殿内での仕事を終え帰るとき、ついにマジムンに出会ってしまった。それは、後ろ向きに立っている洗い髪の女性であった。武士はその女性に、

「あなたはどうしてそこに立っているのですか？」

と声をかけた。すると女は、

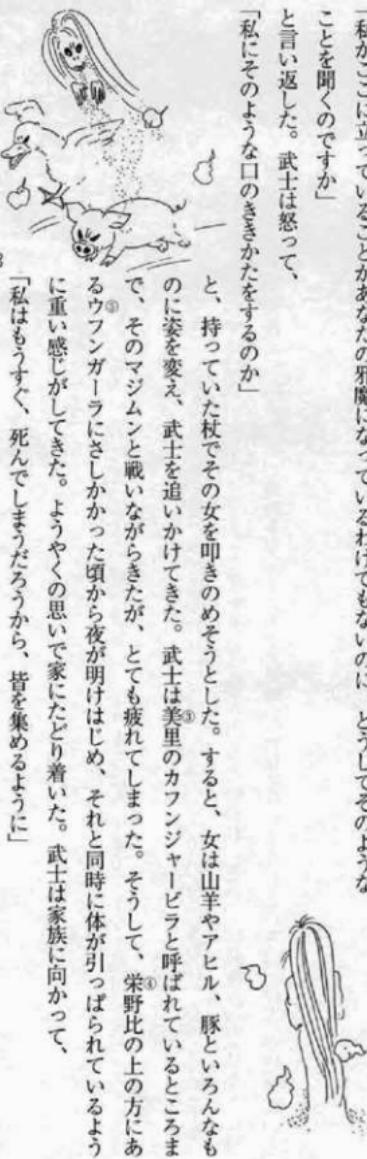
「私がここに立っていることがあなたの邪魔になつていているわけでもないのに、どうしてそのようなことを聞くのですか？」

と言い返した。武士は怒つて、

「私にそのような口のききかたをするのか」

一と、持つていた杖でその女を叩きのめそうとした。すると、女は山羊やアヒル、豚といろんなものに姿を変え、武士を追いかけてきた。武士は美里のカフンジャービラと呼ばれているところまで、そのマジムンと戦いながらきたが、とても疲れてしまった。そして、栄野比の上の方にあらウフンガーラにさしかかった頃から夜が明けはじめ、それと同時に体が引っぱられているよう重い感じがしてきた。ようやくの思いで家にたどり着いた。武士は家族に向かって、

「私はもうすぐ、死んでしまうだらうから、皆を集めるように」



と言う。武士はかけつけてきた親戚や家族に、



「実は昨夜、浦添のアガリトゥングワで後ろ向きに立っている女の人がいたので声をかけた。ところがそれはマジムンであった。そのマジムンはアヒラーマジムンやウワーグワーマジムンに化け私を追いかけてくるので、家に着くまで杖で払いながら帰ってきたが、私はもう後生にいく。あなたたちは今後けつして後ろ向きに立っている人に声をかけたらいけないよ」

それから後、正面からくる人には声をかけてもいいが、後ろ向きにしている人には声をかけてはいけないんだと……。

注 ①東恩納当・・・石川市東恩納にある屋号。心が優しかったので黄金を得て、金持ちになった家。姓は平良。

②御殿殿内・・・總領頭の親方家をさす総称。

③美里の

カフンジャービラ・沖縄市美里にある美咲養護学校入り口左手にアーチ型の石橋があり、その橋をカフンジャーブリといい、そこに流れている川は比謝川の支流のひとつである。カフンジャーブリはその近くにあったと思われる坂のことか。

④榮野比・・・具志川市の字のひとつ。石川市東恩納と境をなしている。

⑤ウブンガーラ・天願川の上流字榮野比にある。具志川野外レクリエーションセンターといづみ病院付近を流れる。

32 犬と猿に変わった金持ち（猿長者）

神里マカト（明治四五年八月一日生）安慶田

昔、あるところに、金持ちと貧乏者のふた組のおじいさんとおばあさんが隣合わせに住んでいました。

「私たちには貧乏で食べるものが何もないから、隣から米だわらを借りてきて、それに残っている米粒をひろい集めてなんとかしよう」

と、おばあさんに話しました。おばあさんはさつそく米だわらを借りに金持ちの家に行き、それに残っているわずかな米粒をひろい集めてご飯を炊きました。そうして火の神にもお供えして、

「わが家はよそさまのようご馳走はありませんが、せめてこれだけでもお召し上がりになつて下さい」と祈りをささげました。その時、どこからともなくえたいの知れないお年寄りが現れました。

「あなたたちは、ウブク（神仏に供える飯）をお供えしているんだね」

「私たちは貧乏なのでウブクしかお供えできないんですよ」

と、おばあさんが答えました。するとそのお年寄りが、

「鍋に水を入れて火にかけてこらん」

と言うので、おばあさんはひとつしかない鍋を火にかけました。すると、鍋の片方にはご飯、もう片方には肉汁のご馳走が出てきたではありませんか。

「なんと不思議なことがあるものだ」

おどろきつつも一人は喜んで、そのご馳走をいたしました。翌日、またあのお年寄りが現れて、

「お湯をわかして浴びてこらん」

と言うので、隣の家からタライを借りてきて、言われたとおりにしました。すると、みるみるうちに一人は若返ってしまいました。

借りてきたタライを返しにいくと、

「どうしてあなた方は、こんなにも若くなったのですか」

金持ちのおじいさんとおばあさんは、うらやましそうに聞きだしてきます。

「実は、昨夜、家を訪ねてきたお年寄りがこのようにしてくれたのですよ」

それを聞くと、

「アイエー！ 私たちも年をとっているし、あなたたちみたいに若くなりたい」

と、あのお年寄りを呼びにいきました。

そうして、そのお年寄りの言うとおりにお湯をわかし浴びると、一人は犬に、一人は猿に変わってしまいました。お年寄りは、金持ちの家に住む人がいなくなると、隣に住んでいる貧乏者のおじいさんとおばあ

さんに、

「あの家に住むように」

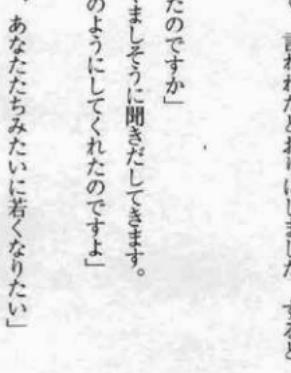
と言いました。

「一人が住んでいると、犬と猿に変わった金持ちが毎日のようにその家にやつてきて、『私たちの家だ、私たちの家だ！』

と騒いだり、庭石にすわったりするので、おじいさんとおばあさんは困ってしまい、お年寄りに相談しました。すると、

「いつもすわる石を焼いておきなさい」

と言ないのでそのようにすると、いつものようにやつってきた猿はその石にすわってしまい、尻を焼いてしまいました。びっくりした猿と犬はそれからというもの家にこなくなり、その時から猿の尻が赤くなつたということです。その後、お



じいさんとおばあさんは「自分たちは悪いこともせずに生きてきたから、神様が助けて下さったんだねえ」と感謝をし、後、子宝にも恵まれ、幸せに暮らしたということです。

注 ①アイエーナー・・びっくりしたり、驚いたりした時に発する言葉。

平成二年二月一五日 宮城昭美・崎山用彰・諸喜田綾子聴取 T180A13

33 手なし娘

普久原ウシ（大正二年一月二十五日生）嘉間良



あるところに、手のない娘がいました。手がないのは、娘に恨みを抱く人が切り落としてしまったためです。そんな娘の不幸を見かねて、首里に勤めている侍が家族で面倒をみるとしました。娘は多くは語りませんが、ふだんの立ち居るまいから身分の卑しくない出であることは容易にうかがわれます。また、侍に助けられた時、娘はすでに身ごもつてもいたということです。

季節も変わり、侍が首里勤めのため家を留守にしていた時、娘に子供が生まれました。娘は恩のある侍に、少しでも早くうれしさを告げようと、使いの者に手紙をたくしました。使いの者は途中で日が暮れたので宿をとることにしました。

その晩のことです。宿の男と世間話に興じていた使いの者は、何げなく自分の用向きを明かしてしまいました。世のなかには不思議なことがあります。実は、その男が、娘にひどいしつけをしたその人だったのです。男は、話を聞くやいなや、「その手紙を見せてくれないか」

と頼みこみ、こつそり内容を悪く書きかえてしまいました。

侍は、首里の勤め先でこの手紙を受け取りました。読みおると表情をこわばらせ「どんなことがあつても、私が帰るまで娘を家にとどめておくよう」という家族あての返事をだしました。使いの者は、帰る時も、行きと同じ宿に泊まりました。そして、手紙はまた宿の男の悪だくみで作り変えられてしまったのです。

さて、侍の家族が届けられた手紙を開いてみると、何と「娘を家から追い出してしまえ」と書かれていたのです。侍の家族は、信じがたい面持ちで、泣く泣く娘と赤ん坊を家から出ていつてもらいました。娘は行くあてもなく、たださまよい歩いているだけでした。疲れは全身に重たくのしかかつてきます。しばらくして、なに

かの拍子に、抱いていた赤ん坊を落としそうになりました。娘は手のないことも忘れて、必死に赤ん坊を守ろうとしました。そのとき信じられないことが起こりました。赤ん坊がすべり落ちていこうとした瞬間、娘に両手が出てきて、その手にしっかりと、赤ん坊を抱きとめていたのです。

平成二年八月三日 伊良音八重子・豊岡早苗・仲里香 聽取 T150A1



34 夫婦の縁

平田嗣昌（明治三四年二月一〇日生）登川

人は生まれると同時に、「誰それと夫婦になりなさい」ということが、すでに決められているそうだ。

そのいわれについて、こんな話があるんだよ。

むかし、あるところにふたりの乞食の子どもがいた。そのひとりは南に住む乞食の子で男の子。もうひとりは山原の乞食の子で、たいそう美しい女の子だったんだって。

さて、いつしか時がたつてふたりとも年頃に成長した。でも、乞食の子だという理由で夫を持つことも、妻を娶ることもかなわなかつた。ふたりはそれぞれ、へこのままではいけないと想い、家を出ることにした。

それで男の方は北へ、女は南の方に向かつて旅を続けることにした。道中、疲れて一休みをしたところで、ふたりは偶然にも出会うことになった。そうして、よもやま話に花を咲かしているうちにすっかり気が合つてしまい、ごく自然に夫婦のちぎりをかわすことになった。ふたりは出会つたその地で家を作り、暮らしに精を出した。やがてふたりに男の子が授かつた。

ところが、その子が五、六才になつた頃、七⁽¹⁾高い生まれをしていたと見え、それがもとで病気になつてしまつた。父親は心配のあまり、物知りのところに駆け込んだ。物知りは、「あなたたちはシジカタ（父方の血筋）の神様を拝んでいないから、そうなつてゐるので、シジカタの神様を拝ますように」と言う。

父親はその言葉を聞いてふさきこんでしまつた。なにしろ、自分の実家に子供を連れて行くことは、自分の素性を妻に知られてしまうことなのだ。夫の様子がふだんと違うことを見とつた妻は、



「どうしてそう、悩んでいるのですか」と心配して尋ねた。

夫は観念して、自分のかくされた生い立ちをつつみかくさず妻に話した。すると、妻の方も自分のことを話し、一人して同じ境遇の中で生まれたことを知り、

「夫婦の縁つてあるものだねえ」

と、お互いの心は晴れ、幸せに暮らしたという。「だから、縁があつて夫婦になった者同士は、仲良くしないといけないよ」と昔の人はいっていたよ。

注 ①セジ高い・・・神の靈力。靈力の高い人をセジ高いという。



35 猫を木に吊すわけ

鳥袋次郎（明治三四年四月七日生）知花

昔、人間の女に化けた猫が、ある男のもとにやつてきた。猫は男をだまして結婚し、夫婦のちぎりを結んだ。

二人の間にウナイ、イキーの子供も授かり、普通の暮らしをしていた。女に化けた猫は、年をとるにつれ、人間をだますことがむづかしくなってきた。夫が出かけると、ときおり、もとの猫の姿にもどり、近所の天井に上って、ネズミを捕らえて食べていた。そのことがしだいに人々のうわさにのぼるようになった。ある日のこと、夫は、

「お前の妻は猫だよ」

と言われ、困った夫は、お年寄りのもとを訪ね、

「妻の正体を知るにはどうしたらいいでしようか」

と相談した。すると、お年寄りは、

「紡いだウー（芭蕉）を針に通し、額に刺してみなさい。そうすればわかるから」

と言われた。その通りにやつてみると、妻の正体は猫だから、クワーと声をだして、ウーを引つぱつたまま逃げたらしい。夫は「どこに行くのかなあ」と後を追いかけて行つたら、宣野湾我^③如古のナガサチのガマ（洞窟）の中で、額に針を刺したまま、うずくまっている妻を見つけた。

夫は、

「お前は畜生だったんだね」

と妻に向かって言い、戻ってきた。猫は年も取っていたのだが、病氣もしていた。残された子どもたちは、「自分たちの親であることにはちがいないから」と、ガマに食事を運び面倒をみていた。

そんなある日の事、お母さんは子どもたちに、



「私はもう、これだけしか食べることができないので、明日からはこなくていいよ」と言った。子どもたちはなぜそのようなことを言うのかふしきに思いながら、翌日いつものように行つてみた。すると、昨日持つていった食事が、ほんの少ししか食べられてなく、母親はすでに冷たいむくろとなつていた。子どもたちは、へたどえイチムシ（虫けら）畜生であつても、親が蟻虫に食べられたら可哀想だから、木に吊してあげよう」と、木に吊してあげたそつだ。

最近では、見かけることは少なくなつたが、猫が死ぬと木に吊すようになったのは、この話の由来からきているんだよ。

注 ①ウナイ・イキー・兄弟姉妹のこと。

②我如古のナガサチ・宜野湾市南部字我如古にあるナガサク（長橋）という洞穴のこと。

③蟻虫……蟻や虫の類。



昭和六一年九月一〇日 宮城昭美聽取

T 39 B 4

36 スーコーに子どもを泣かすのは禁物というお話

(枯骨報恩)

小渡シズ（大正八年一〇月一〇日生）泡瀬

泡瀬に塩田があったころ、製塩の仕事は多くの人手が必要とされていた。そのため、日雇いで作業に従事する方々もたくさんおられた。この話は、その人たちが夕飯のあとに酒を飲みながら座興として語っていたのを、当時十五、十六才だった私が聞き覚えているもののひとつである。話の内容は、たしか亀甲墓のある那覇あたりの(さき)ことではなかつたかと覚えている。

ある日、少年たちが学校帰りに四、五名で連れだつて亀甲墓で遊んでいた。やがて夕方になり、帰ろうとしたときである。亀甲墓の上に座つて、入り口に足を垂らしていた少年の足をつかむもののがいた。誰だろう、と少年は足もとをのぞいて見たが、それらしき姿が見あたらぬ。ふしきな思いにどらわれた少年は、

「なあ、みんな。僕に何があつても家までいつしょに帰つてくれよなー」とお願いした。

「それはあたり前だよ」

と友達は答えた。

「誰かが僕の足をつかまえているようなんだ、目には見えないけど」

「ああ、こわい」

と叫んで、逃げて行つてしまつた。残された少年は、自分でなんとかしなければならないと思って、見えないものに向かつて、

「ねえ、僕にはさっぱり分からんんだけど、どうして僕の足をつかまえているのさー」と尋ねた。



「じつは頼みたいことがあるからなんだ。ここに降りて来て話しかけてくれないか」

と言う返事が返ってきた。少年の足をつかんでいたのは後生の人（幽靈）だったのだ。

「それというのは、おまえ^④フーフダと釘を抜いてもらいたいのだ。私がちょっとの間、外に出でいたら、お墓にフーフダがたたられてしまった。ほら、見てごらん。ここにたでられているだろう。それに墓の周りには船に使う釘も打たれている。これでは墓に入ることができないんだよ」

と懇願した。少年は言われた通りフーフダを取り、釘を抜いてあげた。すると幽靈は、

「今日は私のスーコーなので、私の家ではごちそうをたくさん作っているはずです。お礼と言つては何ですが、あなたに恩返しとして、そのごちそうをあげるから一緒に参りましょう」

と誘つた。そして、生き身の少年が後生の人の家に行くと、そこには親戚の人たちもたくさん集まっていた。後生の人が少年に向かつて、

「さあ、あなたの好きなものから食べなさい」

というので、供えられたごちそうを夢中でほおばつていると、重箱の中身がみるみる減つていった。生き身の人が後生の人と一緒にいる間は、その少年のことを包んでいたので、そこに集まっている人たちには姿は見えなかつたらしい。そのとき、スーコーに連れられて来ていた子どもが、

「僕もごちそうを食べたい」

と泣いた。

「さて、昔からの後生の人は供え物を食べないと聞いているが、今日の後生の人は全部平らげてしまつたさ。お前が食べたいといつても、どこからごちそうを持つてくれればいいの」

と、子どもを叩いたら、よけいに泣きだしてしまつた。それを見た後生の人は、

「ハキサミヨー。子どもを叱らしてしまつては、スーコーを受け取らないほうがいい」といつて逃げてしまつた。そのとたん、今まで後生の人に隠されていた生き身の少年の姿が、

すつかりみんなにさらされてしまつた。スーコーに集まつていた人は驚いて、



「あなたはいつたいどこから来たの」

と聞くので、少年はこれまでのいきさつを話した。そうして、「あなたがたが、みんな可愛い大切な子どもを泣かしてしまったので、後生の人はスーコーを受け取らないと言つて、僕にごちそうをあげただけで、怒つて帰つてしましました。スーコーの時には、絶対子どもを泣かしてはいけませんよ」といった。

このことから、「スーコーの時には子どもを泣かせたらいけない」と言われるようになつたということです。

注

①スーコー……法事。焼香の字をあてる。仏を供養するため回忌」とに行う祭り。

②泡瀬……沖縄市の字。中城湾に突出する半島に位置する。戦前は製塩が盛んでそれに従事する者が多かつた。

③亀甲墓……墓の様式の一つで、屋根が亀の甲の形に出来ている。

④フーフダ……まよけの守り札。護符。

⑤生き身……現世に生きていること。

⑥ハキサミヨー……非常に驚いた時や、悲しい時、苦痛に耐えられない時に発する言葉。

37 白骨になった旅人

普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

月のない晩でした。ひとりの旅人が、国に帰るために小走りに山道を歩いておりました。ところが、あまりにも急いだものですから、疲れてしまつて、途中で一休みすることにしました。

「よっこらしょ」

と声をあげて、かたわらの石の上に腰をおろしたその時です。

いきなり旅人の目の前に、ひげづらの恐ろしい顔が現れたのです。旅人はすっかり肝をひやしてしまいました。この顔が盗つ人であることはまちがいありません。旅人は、はじかれたように石の上から飛び上ると、必死になつて逃げました。でも、疲れた足ではそんなに早くは走れません。とうとう、盗つ人に追いつかれてしまいました。もう助かるあてはありませんでした。旅人は金も取られたあげく、大切な命まで奪われてしまったのです。

それから何年か経つたある日のことです。ひとりの男が、盗つ人に殺されたあたりを通りがかりました。そうして、今はすっかり白骨化してしまった旅人の死体を見つけたのです。へおお、かわいそうに！男はひとりことをつぶやきながら、ばらばらになっていた旅人の骨を拾い集めて元の位置につなげていきました。こうして、骨をつなぎ終えた時のことでした。ふしきなことに、白骨化した旅人の骨が元の人間として生き返ったのです。びっくりしている男に向かつて、生き返った旅人は、

「金を返せ、お前が私から奪つた金をすぐに返せ」

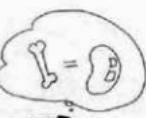
とつめよりました。男には何のことやらさっぱり意味がわかりません。

「返せと言つたって、私はあなたから何もとつていませんよ」

と男が言つても、まるで聞き入れてもらえません。これではいつまでたつても決着がつくはずがありません



ん。困つてしまつた男は、とうとう裁判に訴えることにしました。



いよいよ裁判の日を迎えた。ふたりは、それぞれに自分の言い分を裁判長に申し上げました。でも、聞けば聞くほど話がちんぶんかんぶんで、裁判長も困つてしまつました。その時、旅人の骨をつないであげた男が思い出したように言いました。



「裁判長さま。私がこの人の骨をつなげて人間に戻した時、ソーキ骨（肋骨）が一本足りなかつたことを覚えております。ですから、トーマーミー（そら豆）のホネを代わりに一本入れておきました。それが動かぬ証拠です」

二二二

二二二
と叫びました。

「それが証拠なら元に戻してみるのだ」

と裁判長が大きな声で命令を発しました。まわりのものたちが、いわれたとおりにその人を分解すると、中からトーマーミーのホネが出てきました。こうして、分解された人は元の白骨の姿に戻つたということです。

平成二年二月二二日

豊岡早苗鷹取

T56A11

仲宗根トミ (大正二年五月五日生) 登川



大晦日というのに、子どもたちに肉を食べさせることもできません。お金にかえられる物でもあれば良いのですが、何ひとつないのです。貧乏者は泣きたい思いでした。そのとき、ひとつ考へが頭に浮かびました。へそつた、あるなーかー、に頼ることにしよう。城間仲と言えばうわさに「上のほどの大金持ちだから、きっと何か手に入るにちがいない」思い立った貧乏者は、城間仲に忍び込むことにしました。でも、泥棒のまねごとをするのはさすがに気がとがめました。でも、背に腹はかえられません。勇気をふるい立たせると、貧乏者は人目をさけて城間仲の庭に忍び込みました。そうして、庭先に積まれた薪の中にもぐりこみ、城間仲の夕食が終わるのを待つことにしました。
「大金持ちなら必ず食事の食べ残しが出るにちがいない、皆が寝静まるのを待つて、それを盗み出して子どもたちに食べさせてやろう」と思ったからです。ところが、奥の座敷で庭を眺めていた城間仲の主人は、たまたま怪しい人が薪の中にひそむのをすっかり見ておられたのでした。しかし、誰にもそのことを明かしませんでした。

やがて、夕食の準備も整い、年越しの食事を囲んで家族が一堂にそろいました。その時です。それまで口を閉ざしていた主人が、おもむろに声を発しました。
「薪の中に隠れている人よ、ここに出ていらっしゃい。私たちと一緒に年越しの食事をしようではないか」

その言葉を聞いて、家族もびっくりしましたが、盗つ人に入った貧乏者は腰をぬかさんばかりに仰天しました。なんと、自分のやろうとしている悪事はすべて見つかっていたのです。これでは、



観念するほかありません。貧乏者は、おそるおそる主人の前に姿をあらわしました。そうして、目に涙を浮かべて申しひらきを致しました。

「私が城間仲の家に忍び込んだのは、あなた方が床につかれたところをみはからつて、夕食の残りを盗み出し、子どもたちに食べさせようと思ったからです」

と言いました。貧乏者は、どんなおとがめも受けるつもりでおりました。ところが、

「えうか、そういう訳があつたのか。なら、お前も腹いっぱい食べてから、この家で煮たものを持つて帰つて、妻子の腹も満たしてあげなさい」

と主人はやさしい声でおっしゃつたそうです。貧乏者は、身にある情けを受けたことを深く感謝し、この御恩として「世の末まで、城間仲を金持ちにして栄えさせて下さい」と願つたそうです。

そんなわけで、城間仲は今でも金持ちなんだそうだ。人間は何よりも情が大切なんだ。貧しい者を助ける心、愛。これこそ何とも替えがたい宝なんだね。この話からすると。

注 ①城間仲・・・「城間」は地名で浦添市城間のこと。「仲」は屋号で、大金持ちとして人々に知られている。

『沖縄語辞典』 国立国語研究所編集 大蔵省印刷局発行 昭和五八年四月三〇日

『角川日本地名大辞典47 沖縄県』 竹内理三編 角川書店発行 昭和六一年七月八日

『原色沖縄海中動物生態図鑑』(五版) 白井祥平著 沖縄教育出版発行所 一九九〇年八月一日

『沖縄いろいろ事典』 ナイチャーズ 垂見健吉他 株式会社新潮社発行 一九九二年四月二〇日

『私たちの沖縄市——みに事典——』 崎原恒新著 一九九一年八月一日発行

『沖縄おもしろ方言事典』 沖縄雑学俱乐部編者 金城正雄発行 一九九八年五月一〇日第九刷

『北中城の民話』 北中城村教育委員会発行 平成五年三月二〇日

『いしかわの民話 下巻・伝説編』 石川市教育委員会発行 昭和六〇年三月三一発行

『具志川市史 第二卷 民話編 下・昔話』 具志川市史編さん委員会編集 具志川教育委員会発行 平成十二年三月三十日

『沖縄大百科事典 上・中・下』 沖縄タイムス社発行 一九八三年五月三〇日

年令早見表／2002（平成14）年

西暦	年号	年令
1891	明治24	111歳
1892	25	110
1893	26	109
1894	27	108
1895	28	107
1896	29	106
1897	30	105
1898	31	104
1899	32	103
1900	33	102
1901	34	101
1902	35	100
1903	36	99
1904	37	98
1905	38	97
1906	39	96
1907	40	95
1908	41	94
1909	42	93
1910	43	92
1911	44	91
1912	大正元	90
1913	2	89
1914	3	88
1915	4	87
1916	5	86
1917	6	85
1918	7	84
1919	8	83
1920	9	82
1921	10	81
1922	11	80
1923	12	79
1924	13	78
1925	14	77
1926	昭和元	76
1927	2	75
1928	3	74
1929	4	73
1930	5	72

西暦	年号	年令
1931	6	71歳
1932	7	70
1933	8	69
1934	9	68
1935	10	67
1936	11	66
1937	12	65
1938	13	64
1939	14	63
1940	15	62
1941	16	61
1942	17	60
1943	18	59
1944	19	58
1945	20	57
1946	21	56
1947	22	55
1948	23	54
1949	24	53
1950	25	52
1951	26	51
1952	27	50
1953	28	49
1954	29	48
1955	30	47
1956	31	46
1957	32	45
1958	33	44
1959	34	43
1960	35	42
1961	36	41
1962	37	40
1963	38	39
1964	39	38
1965	40	37
1966	41	36
1967	42	35
1968	43	34
1969	44	33
1970	45	32

西暦	年号	年令
1971	46	31歳
1972	47	30
1973	48	29
1974	49	28
1975	50	27
1976	51	26
1977	52	25
1978	53	24
1979	54	23
1980	55	22
1981	56	21
1982	57	20
1983	58	19
1984	59	18
1985	60	17
1986	61	16
1987	62	15
1988	63	14
1989	平成元	13
1990	2	12
1991	3	11
1992	4	10
1993	5	9
1994	6	8
1995	7	7
1996	8	6
1997	9	5
1998	10	4
1999	11	3
2000	12	2
2001	13	1
2002	14	0

おわりに

「昔話をお聞かせ願えませんか」と市内の古老に呼びかけて、方言による語りの記録作業に着手してから二十年の歳月が経ちました。その間、昔話を聞かせてくれる古老がめっきり少くなり、聞き取り調査も困難をきわめております。かつては、どこでも聞くことができた「雀孝行」の話でさえ、今では、とんと耳にすることはありません。

沖縄市教育委員会ではこのような含蓄のある古老の語り口を後世に残すため、音声による記録はもちろん、これを文字化して広く市民のみなさまに読み継がれる本として発刊することになりました。

本書に収録された昔話の語り手には、すでに物故された方もおりますが、テープに遺録された在りし日の声調は、時間を超越して聞くものを魅了してやまないものがあります。

このように、音声でなければ伝えることが難しい昔話の領分をあえて文字化し、本にすることは、多くの市民にそのおもしろさの一端でも読みとついただけたらと考えたからです。本書が昔の先祖たちをしのぶよすがとなり、沖縄市の未来を創造するこころの架け橋になってくれることを祈念するものであります。

最後に、編集に際し貴重なご意見と援助を下さいました皆様に、厚くお礼を申し上げます。



むかしばなしⅡ

沖縄市文化財調査報告書第27集

平成14年3月29日 発行

発 行 沖縄市教育委員会
編 集 沖縄市立郷土博物館
〒904-0031 沖縄県沖縄市字上地235-3
（098）932-6882
印 刷 〒901-1111 南風原町字兼城577番地
光文堂印刷株式会社
（098）889-1131